

消えゆく村 ともる光

写真は東京新聞 2 月 16 日夕刊「にっぽんルポ」。「限界集落」と言われた村に移り住んだ青年を通して、地域の現実を見つめる記事であり、抜粋して紹介したい。

静かな村だ。聞こえるのは、清流のせせらぎや小鳥のさえずり。川沿いに並ぶ家屋は障子が破れ、人の気配を感じない。たまに走り過ぎる車には、もみじマーク。通りには子どもの姿を見かけない。面積の 9 割を山林が占める群馬県南牧村。2014 年に民間シンクタンクから「全



国で最も消滅可能性が高い」と名指しされた村だ。人口 1866 人(1 月末現在)のうち、65 歳以上の割合は 62%に達する。傾斜地を生かしたコンニャクイモの栽培や養蚕で栄えた村は、1955 年には人口 1 万人を超えていた。その後は品種改良や価格競争の波にのまれ産業が衰退し、人口流出が続く。高齢化率日本一の村の姿は、日本の将来像にも重なる。ただ、3 年前に村へ移住し、野菜作りに励む田中陽司さん(28)は「幸齢化率日本一の村」と呼ぶ。「限界集落と呼ばれる村から、世界を変えるチャンスがある」。老いゆく村を支えようとする人々を見つめた。

鉄道も国道もコンビニもない群馬県南牧村で、役場から北へ 5 ㎞向かうと、山あい広がる畑に立派なダイコンやホウレンソウが育っていた。畑の主は、東京・渋谷生まれの田中陽司さんだ。「この村は『宝の山』ですよ。おいしい野菜が栽培できる畑が放置されてるから」。耕作放棄地を無償で借り、50 種以上の野菜を栽培する。荒れ放題の畑は化学肥料が抜けきり、農薬を使わない自然農



法に適している。国連難民高等弁務官だった緒方貞子さんにあこがれ、高校卒業後に米国へ留学。大学で少子高齢化が進む日本が紹介され、南牧村が取り上げられた。帰国して都内で通訳や翻訳の仕事をこなす中、村が地域おこし協力隊を募集していると知り、迷わず参加した。

よそ者扱いされて戸惑ったことは「まったくない」という。畑を無償で貸してくれた村民からは「使ってもらってありがてーや」と言葉を掛けられた。「農業をずっとやってきたおじいちゃんやおばあちゃんは、おいしい野菜をつくるノウハウを蓄積している。それをただで教えてくれる」村が 1 万円で貸し出す空き家に住み、収穫した野菜は村民にふるまう。「この村では一人一人が助け合っているから、悲愴感がないんです。共感できる仲間を増やして、耕作放棄地をどんどん開拓していきたい」農作業を体験したい海外の若者を受け入れ、収益の一部は飢餓に苦しむ発展途上国の寄付に回している。村に根を張りながら、世界とつながっている。

(2019 年 3 月 5 日)